水戸黄門(三)

中将鷹(上)

村上元三

講談社文庫

定価480円

水戸黄門(三)　中将鷹(上)
村上元三

昭和55年2月15日第1刷発行
昭和57年5月4日第9刷発行

発行者　三木 章
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　豊国印刷株式会社
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社若林製本工場

© Genzo Murakami 1980

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。

講談社文庫

水戸黄門(三)　中将鷹(上)

村上元三

講談社

目次

中将鷹(上)　九
鶴松　二一
東夷　三四
左近の局　四七
夢のうちに　六〇
竜巻　七三
明暦の大火　八六
緑蔭亭　九九
史館創立　一一三
江戸と高松　一二五
鹿の角　一三七
高い峰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

月の影　一五一
冬の声　一六三
ひと夜の夢　一七七
粉雪　一九〇
鶴の羽ばたき　二〇三
むかしの夢　二一七
狼の眼　二三九
ちぎれ雲　二四三
佐倉騒動　二五六
獅子の頭　二六八
皇居炎上　二八二
仙波湖の蓮　二九五
頼房病む　三〇九
蟬の声　三二二

殉死の禁　三三六
瑞竜山　三五〇
九年目の顔　三六四
水戸家のあるじ　三七七

中将鷹

（上）

鶴松

一

「まいれ、まいれ」

三歳とは思えぬほど、鶴松は、言葉つきがはっきりしている。

大きな声で下知をするように言いながら、築山へ駆けあがったり、庭木のまわりを走っているうちに、転ぶこともあったが、決して鶴松は泣いたりしない。

じっと唇をかみ、黙って立ちあがると、また元気に走り出した。

広い高松城の本丸うちだが、この鶴松の御殿は新しく建てられたもので、塀に取りかこまれた庭は、十坪ほどしかなかった。

建物も五間だけなので、まだ小さいのに鶴松は、もう自分の力を持てあましているように見える。

鶴松が転んだりすると、たよは走って行って抱き起そうとしたが、そういうとき石那喜平次は、

「これ」

と言って妻を制した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

そういうときの夫の目つきが、たよには、ちょっとこわくさえ思える。

江戸においでのご主君、水戸光国のおんために、そのお子を甘やかせてお育て申してはならぬ、と喜平次は懸命になっているのであった。

鶴松の遊んでいる姿を見ると、喜平次は、光国がまだ長丸といった三歳か四歳のころ、水戸の三木仁兵衛の屋敷に育てられていた昔を思い出し、自分も八つか九つで長丸に仕えた時代が、もう一度くりかえされているような気がした。

「われら夫婦が今日あるは、中将様がおん為ぞ。世の常の忠義、というだけではない」

いつも、妻のたよにそう言うとき、喜平次は、涙ぐんでいることがある。

ことし三十二歳の喜平次が、江戸とこの四国と遠く離れていても、あるじの光国を思う気持は、少年のころとそのまま変わらずにいるのだ、とたよにもわかることであった。

この高松へきてから、石那喜平次は、ほとんど城の外へ出たことがない。

ことしの五月二十四日、自分が高松の松平家に抱えられ、幼君の鶴松の守役を仰せつけられるよう骨を折ってくれた家老の石井仁右衛門が、急の病で世を去ったとき、喜平次は、葬列に連なって城の外へ出たことがある。

石井仁右衛門信親は、もと水戸頼房の家来で、知行は三百五十石、持筒頭をつとめていたが、江戸のころから仁右衛門は、喜平次を知ってくれていた。

水戸家の世嗣で、ことし二十七歳になる光国にとって、喜平次は初めての家来であり、のちに中村姓を名乗って、光国の小姓として仕えるようになった、という経歴も、光国と喜平次がどういうふうに主従として結びついたかということも、仁右衛門はよくわかっている。

のちに仁右衛門は、頼房の長男頼重が、高松の藩主として封ぜられたとき、頼房の命を受けて頼重づきの家老となり、二千石の扶持を受ける身分になった。

その仁右衛門に死なれたのは、喜平次夫婦にも大きな打撃であったが、しかし高松藩の家中の者すべては、喜平次に対してべつに白い目を向けるでもなく、といって特別に扱うということもしない。

城中の表御殿の一部に、そこだけ別棟に新しい建物が作られ、鶴松という男子が、家来や乳母、下女たちに大切に育てられていることは、家中の重立った侍たちは知っていた。

しかし、鶴松が誰の子かということは、重臣たちのあいだで、まだ秘密にされている。

この承応三年で、鶴松は三歳になる。

鶴松が高松へ迎えられたのは、去年の秋で、大坂から特別に仕立てられた船に乗り、守役の石那喜平次夫婦、田中与右衛門夫婦、それに医者の草川玄廸、足軽三人、乳母ひとりに下女が二人、という人数で、国家老の本多三右衛門、石井仁右衛門、大須賀久兵衛たちが舟着場まで出迎えた。

船には三つ葉葵の紋を染めた船印が立っているし、城下の者たちも、どなた様のお着きだろう、と思ったらしく、大ぜいの男女が集まってきそうになった。しかし藩の足軽たちが、港からすぐ近い城までの道筋を、厳重に固め、船からそのまま乗物に入った鶴松の顔さえ見せないようにした。

静かな瀬戸内の海上から、高松の城を見たとき、石那喜平次は、ほっとした思いになり、涙が出た。

これで、あるじの光国の子の鶴松が、無事に育てられる。そして又、自分の新しい生き甲斐が、高松の地から生ずるのだ、と思うと、勇気がわいた。

それは、たよも同様であった。

夫の喜平次と自分が、今まで重ねてきた苦労も、これで忘れてしまおう。夫が旧姓の石那に戻った以上、自分も江戸のころの辛かった毎日のことなど、悪い夢と考えたほうがいい。

鶴松君のご養育に、これから自分たち夫婦は生き甲斐を見出すのだ、とたよも明るい気持でいた。

鶴松の乗物が、高松城内の本丸の大玄関へ着いたとき、藩主の頼重は、自ら出迎えた。

「ようこそ見えられた」

式台に据えられた乗物から、二歳の鶴松が、たよに手をとられて出てきたとき、頼重は、笑いながら声をかけた。

鶴松は、光国の幼年時代に似て、色の白い、ふっくらとした顔立ちで、こういう城の大玄関に立っても、物おじした様子もない。

「中将どのに、よう似ておられる」

うしろにいる老臣の肥田和泉政勝をかえり見て、にこりと笑った。

「御意」

肩衣の背を丸め、皺の多い顔に、肥田和泉は、今にも泣きそうな色を浮べた。

肥田和泉も、やはり父の頼房から頼重につけられた家老であったが、ことし九十歳の高齢になり、すでに隠居をして、あとを嫡男の頼母にゆずっている。

しかし今日は、鶴松が高松城へ入るというので、和泉は、あるじの頼重に従って、大玄関まで出迎えたのであった。

「これへ」

と言って頼重が手をのべると、鶴松は、気まり悪がるでもなく、その手につかまった。

頼重に手をひかれ、表御殿へ入って行く小さい鶴松の後姿を見送りながら、石那喜平次は、光国が長丸から千代松と改めたころ、自分が側に仕えていた時のことを思い出し、式台の外に両膝をついたまま涙ぐんでいた。

一たん表御殿へ入った鶴松は、その日から、新しく建てられた住居へ移った。

二

頼重は、鶴松を自分の子に貰い受けることにしているが、それは時機を見て弟の光国に頼もう、と思っているのであった。

光国が、江戸小石川上屋敷の中で、侍女の弥智(やち)に手をつけ、産ませた子がこの鶴松だということは、頼重としてもまだ外部へ発表したことはない。

しかも光国が、弥智の腹の子を水に流せ、と命じたのを、老臣の伊藤玄蕃友玄と妻の志那(しな)が、そっと弥智を引き取り、無事に子を産ませただけに、なおさらであった。

江戸の水戸屋敷にいる光国は、弥智の子は水に流された、と信じている。

それを頼重は、伊藤玄蕃に頼まれ、自分の家の江戸家老彦坂織部と相談して一たん鶴松を江戸

から京都へ移し、滋野井大納言季吉の屋形に世話をしてもらい、改めて内密にこの高松の城へ引き取ったのであった。

頼重は、先の大老土井大炊頭利勝の娘を妻に迎え、そのあいだに松千代という男子も生れている。

だが、光国は、兄の頼重をさしおいて自分が水戸家の後つぎになったのは心苦しい、その代り、兄上のおん子をわが後つぎに迎えたし、と言って、すでに兄弟のあいだに約束が出来ていた。

だから、頼重の子の松千代は、光国の後つぎになる代り、光国が水に流したつもりでいる鶴松を、自分の後つぎにする、と頼重はすでに決めているのであった。

「苦労をしたであろう」

鶴松が無事に高松へ着いた日、頼重は、鶴松づきの石那喜平次や田中与右衛門、医者の草川玄廸などを呼んで、自分の家老たちも集め、ご酒下されのことがあった。

「この後も、そのほうたちに鶴松どのがこと、頼む」

と頼重が言った言葉の中には、正式に光国と鶴松の父子対面のことがあるまで、鶴松のことを公式に発表は出来ないし、高松藩の禄は与えても、守役たちを正式に自分の家来として扱うわけにはいかぬ、という意味も含めてある。

それは、はじめから石那喜平次たちも、覚悟をしていたことであった。

だが喜平次は、高松城内に住んでから、頼重という人物を改めて見直すようになった。

江戸の水戸屋敷にいたあいだは、光国の陰に隠れて同腹の兄の頼重が、光を失っていたような

感じがあった。

武芸や学問をやっても、弟の光国のほうがすぐれているし、ことに吉原通いをするようになってから、諸大名や旗本、それに江戸の庶民たちまで、水戸家の若君といえば、ことごとく光国ひとりに注意が集中していた。

派手な光国の存在に対して、江戸のころの兄の頼重はずっと地味であったが、高松藩主として封ぜられてから十二年、三十二歳の今日まで、頼重は、領内によい政治を布いている。

幕府としても、この高松を水戸の支藩としては見ず、中国四国地方の監察という重任を頼重に託しているし、表高は十二万石だが、実収は十六万を越しているという。

だが、城のある高松という地は、海を埋めて拡げたので、飲料水が悪く、頼重の封ぜられる前、生駒家の時代から士分も町人たちも水に困っていた。

頼重は、就封の後、地中に暗渠を通して、武家町や町家に新鮮な井戸水を供給するようにし、港の改修を行なったりした。

だが、生駒家がお家騒動を起し、寛永十七年に没落した後だけに、頼重も、民心を収めるのに苦労をしたらしい。

父の頼房からつけられた家老の中に、本多三右衛門や石井仁右衛門のようなすぐれた人物がいたためもあるが、頼重は自ら領内を巡視し、民の声を直接に聞くようにつとめた。

鶴松の供をして、石那喜平次たちが京都から高松へ移ってきた承応二年は、高松の城下で四百八十戸も家が焼けた大火のあとだが、頼重の政治も、ちょうど軌道に乗ったころであった。

去年の六月、江戸藩邸にいる頼重の夫人が女子を産み、糸姫と名づけたが、二月に高松へ帰っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong